



労働政策研究・研修機構副主任 下村 英雄

企業は採用の際に学業成績をあまり重視しないといわれることもあるが、電通百英会などの調査では、実際には対人関係が豊かで、勉強に熱心に取り組んだ学生が本命企業から内定を得ているという。調査に加わった独立行政法人、労働政策研究・研修機構キャリアガイダンス部門の下村英雄副主任研究員に寄稿してもらった。

電通百英会と京都大学は2007年秋、全国の大学3年生約1000人を対象に学生生活に関する調査を実施した。08年秋には前年調査の回答者に就職活動の結果を聞く追加調査を行い、約600人から回答を得た。

積極的に交流

大学生の就職活動は「対人志向」と「勉学志向」の2つの側面から整理できる。調査では、第1志望の本命企業からうまく内定をとる学生は、学内外で様々な人と積極的に交流している実感が浮き彫りになった。

例えば、携帯電話の登録人数も多ければ、日ごろ、頻りにメールをする人数も多い。さらには、親しい異性の友人がいる割合も高い。しかも、そうした学生は大学の勉強にもかなり熱心だ。

就職に有利な学生は…

対人関係・勉学意識高く

キャリア形成主体性カギ

友少ない試験組
回答者の中には、試験を受けて将来の進路を決める学生がいる。大学院就職活動を行わなかった

学生は他の学生に比べて、ゲームに費やす時間が長身につき、自ら幅広い対人関係を持とうとしない調査結果を、対人志向

本人の将来志向と勉学志向の両面が低い学生たちである。こうした学生たちに対して、どのような学生に対して、

が全般的に低い。①大学の授業に関する勉強時間が短い②基礎的な学力やスキルが身についたと感じていない③大学で学ぶ理由を「なんとなく」と回答する。④大学で学ぶ理由を「なんとなく」と回答する。⑤大学で学ぶ理由を「なんとなく」と回答する。⑥大学で学ぶ理由を「なんとなく」と回答する。

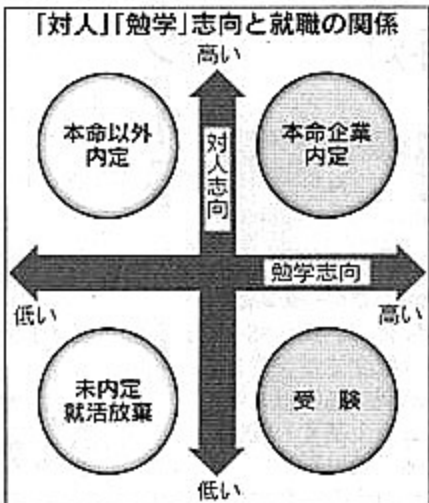
最も深刻な結果を示したのは、就職活動を行わなかった学生や就職活動で内定をとれなかった学生である。この学生層と勉学志向の2軸上に整理したのが図である。ここから、大学生の就職に向けたキャリア教育について、どのようなことが

学生には、対人志向に焦点を当てたキャリア教育の取り組みが必要だ。特に、試験組の学生たちの対人志向の低さは問題視すべきである。将来、研究者、公務員、教員のどの職業に就くとしても、対人志向は高い方が望ましい。試験組の学生は、対人志向を伸ばせば、キャリア教育のどのような取り組みも、最終的に大学で行う前段階の授業・学習に取れんするようになり、同じく勉学に打ち込めるようになる。

進学や公務員・教員などを目指す学生で、勉学志向は高いが、対人志向は低い。大学の勉強に費やす時間が長く、かつ大学の勉強が役立ったと考える学生が多い一方で、親友がいると答えた割合は約5割。他の学生の約7割を下回る。

大学生の就職活動に関する議論では、就職活動のルートに乗らない試験組はあまり注目されなかつた。対人志向の低さが

現在、大学ではキャリアセンターを整備し、キャリア関連の授業科目を増やし、手厚いキャリア教育を提供している。一方で、キャリア教育「大学生研究フォーラム」が7月25、26日、京都大学で行われ、様々な観点から幅広い議論を行う予定である。



「対人」「勉学」志向と就職の関係

教育

はかなり普及しており、製品の完成度も高く、学校や個々の教室に導入が可能な価格になってきた。携帯型メモリーの紛失や盗難が後を絶たない現在、情報保護ツールの整備も欠かせない。保護者への迅速で豊富な学校情報の提供もますます重要となってきた。

最新技術の活用

学ぶ力を身につけることが重要である。それには知識や情報を得るだけでなく、課題意識を持ち、自律的に必要な知識などを探して、編集する力の育成が求められる。最新技術を眺めながら、教育と学習の在り方を根本的に再考する時代が目の前に来ていると実感した。

(玉川大学教授 小松郁夫)